

4 ^{みなみほっけじころうでん}南法花寺古老伝 1冊 [有形文化財（書跡・典籍）]

[所在地] 高市郡高取町大字壺阪3

[所有者] 南法華寺

[法量] 縦27.0cm 横19.8cm

[時代] 室町時代・明応5年（1496）

[概要]

本品は、南法華寺（壺阪寺）の大宝3年（703）の開基から鎌倉時代までの寺史を書き綴った、寺院縁起である。もとは鎌倉時代の建暦元年（1211）に解脱房貞慶が撰述したものとされ、室町時代の明応5年（1496）に南法華寺の僧侶・大門坊実舜が書写したものである。

内容は、大宝3年の南法華寺の開基から筆を起し、元正天皇・長屋王・藤原道長らの帰依による寺の発展、諸仏像の由緒、平安時代・鎌倉時代の伽藍の焼亡と復興の過程などが詳述されており、寺史を知る上での根本史料であると言える。

編纂の根拠史料としては、平安時代後期までに成立したと思われる僧侶・蔵俊手沢の「古記」や、「両所菩薩験記」といった逸書が使用される他、平安時代前期の仏教説話集「日本感霊録」の逸文も引用されており、歴史学のみならず、文学史的にも重要性が認められる。

本品は鎌倉時代の古態を伝える善本であり、日本の古代～中世にかけての宗教・社会・文化を知る上で極めて重要な古典籍であると評価できる。

